

野 菜

実 況…(28年1月20日現在)

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

南越地区は1月上旬頃から育苗を開始している。若狭地区では1月7日定植のセル苗が本葉5～6枚になっている。

(2) ミディトマト

若狭地区の促成長期どりは、19～20段果房開花中で13～14段果房を収穫中である。着果、玉太りとも良好である。灰色かび病、うどんこ病が少発である。

(3) イチゴ

県内は、1番果房が収穫中～終了で2番果房が開花から肥大中となっており、花数は多い。暖冬の影響で生育はやや早まっている。

うどんこ病、灰色かび病が一部微発、ハダニ類が微～局中発、アブラムシ類、コナジラミ類が微発である。

葉菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区のハウレンソウは、11月中旬播種が約70日で収穫中となっている。

(2) ネギ

坂井地区の6月末定植ネギが、12月20日から順次収穫されほぼ収穫を終了した。さび病が微～中発である。

根菜類

(1) コカブ

三里浜砂丘地は、暖冬の影響で生育や肥大が早まっており、2月出荷用が1月に収穫されている。コナガが局中発である。

2 露地野菜

果菜類

(1) 一寸ソラマメ

坂井地区は、分枝数4～5本、草丈20～30cmとなっている。気温の高い日が続いたため平年よりかなり生育が進んでいる。若狭地区では、本葉3～5枚、分枝長5～15cm、分枝数4～6本となっている。

葉菜類

(1) キャベツ

坂井北部丘陵地は、生育が良好で晩生品種を収穫中である。福井市南部地区では9月10日定植したものが収穫中である。坂井地区の春どりは、本葉9～12枚で生育は良好である。

(2) ブロッコリー

南越地区の収穫は、1月中旬で終了した。

(3) ネギ

坂井北部丘陵地は、年明け後も継続収穫である。水田地帯の5月下旬～6月下旬定植したものが一部未収穫があるもののほぼ終了した。奥越、坂井地区の越冬ネギ初夏どりは、生育の早いところで葉鞘径が22～23mmとなっている。さび病が一部少発である。

県内の28年度産定植苗について、1月中旬から順次播種開始となっている。

(4) 勝山水菜

1月上旬からトンネル被覆が開始された。トンネル被覆したものは生育が早まり、2月上旬からの出荷を予定している。

根菜類

(1) ニンジン

坂井北部丘陵地は、12月末でおおむね終了した。三里浜砂丘地では、12月末までに7割収穫され残りを収穫中である。肥大が遅くM中心の収穫となっている。

(2) カンショ

坂井北部丘陵地は、キュアリング品を継続出荷中である。

(3) タマネギ

坂井地区は、草丈15～25cm、葉鞘径3.5～5.7mm、生葉数3～3.9枚になっている。

福井地区では、草丈28cm、葉鞘径7.5mm、生葉数2.5～3枚になっている。暖冬の影響で生育が進んでいる。

(4) ニンニク

福井地区は、草丈40cm、生葉数4.2枚になっている。暖冬の影響で4月上旬並みまで生育が進んでいる。さび病が微発である。

対 策

1 施設野菜

果菜類の定植が2月中旬～3月下旬にかけて行われるが、定植以降、極端な低温(寒波の戻り)や降雪があった場合には、定植苗の活着不良や初期生育の遅れが心配される。特にトマトでは低段果房の着果不良、チャック果・窓あき果の発生、生長点の芯止まり等の影響が懸念される。半促成栽培の果菜類については、定植前からの地温確保に努めるとともに、定植後の苗活着が順調となるよう特に低温時の保温管理を徹底する。

2 露地野菜

越冬野菜の追肥は、厳寒期、降雪期には停滞しているため、圃場の雪融け状況や気温の上昇を見計らい遅くならないよう適宜に行う。なお、圃場に雨水や融雪水による停滞水が見られる場合は、速やかに排水対策を行う。

3 育苗管理

果菜類

(1) 育苗管理

育苗は、生育ステージごとの生育適温を確保するとともに、日照の有無、かん水量やかん水時間に注意しながら健苗育成に努める。

<温度管理>

発芽温度は28～30℃と高いことから、通常の育苗床とは別に温床線を密に張っておくとともに、播種2～3日前から通電しておき適正温度を確保しておく。

発芽後は徐々に温度を下げながら管理する。ただし、苗の徒長防止のために温度を下げ過ぎると低温障害を発生させる場合があるので注意する。

定植前1週間程度からは温度を徐々に下げながら、苗を低温に馴化させていく。

<接ぎ木管理>

接ぎ木を行う場合は、接ぎ木前日に十分な日射を受けていると活着が良くなるので、天候をみな

から接ぎ木日を設定する。接ぎ木後数日間は、気温 25～28℃で管理し接ぎ木部の癒合を促す。これより低温では癒合が遅れ、高温では軟腐病等が発生しやすくなるので、接ぎ木後の温度管理には留意する。

<日照管理>

苗の徒長を防ぐため、育苗期間中では夜間や低温時以外はカーテンやトンネルを開放し光を当てるとともに、生育ステージに合わせながら株間を広げて、一株毎の日照量を確保する。

<かん水管理>

かん水は、必ず朝実施する。なお、多かん水は苗を徒長させやすいので、夕方には土の表面が乾く程度のかん水量とする。また、モミガラを多量に混合した鉢土は乾きやすいことから、かん水回数が多くなるが 1 回当たりのかん水量を少なくする。

<品目別管理>

①□ トマト苗

気温を日中 22～25℃、夜間 15～16℃を目標に徐々に温度を下げながら管理する。接ぎ木後数日間は気温 25～28℃で管理し、萎れを防ぐために有孔ポリのべたがけ被覆等を行う。また、夜間の保温のためにコモ等の保温資材をポリトンネルの上に掛けておくが、日中は高温にならないよう被覆資材を取り除いて光を当てる。本葉 3 枚までは、12℃以下にならないように管理する。定植前の苗の馴化においては、極端な低温に合うと奇形果やチャック果の発生が多くなるので、10℃以下にならないように管理する。生育が進むにつれ苗の日当たりを良くし、充実した苗に仕上げるため、鉢間隔を生育に応じて広げるが、特に、7～8 葉期頃からは急激に葉が込み合うようになるので、鉢広げが遅れないようにする。

② キュウリ苗

気温を日中 25～28℃、夜間 18～20℃を目標に管理する。なお、台木のカボチャは気温を日中 20～25℃、夜間 14～15℃が育苗適温であるので、キュウリとは別の苗床を利用するのが望ましい。また、低温日に苗床のトンネルを裾上げ換気した場合には、苗床周辺部のキュウリがカンザシ苗となって生長が停止する場合があるので、トンネルは上部を開閉して温度を調節する。

③ スイカ、メロン

播種 2～3 日前から播種床に通電しておき、発芽適温 28～30℃を確保してから播種する。発芽後は気温を日中 25～28℃、夜間 18～20℃を目標に管理する。

(2) 定植の準備

できるだけ早めに圃場準備を行い、定植までに十分地温を高めておく。

<排水>

ハウス周囲の排水溝を整備して、外部からの雨水の侵入を防ぐとともに圃場の乾燥に努める。

<地温確保>

定植 1 か月前頃には被覆をして、圃場の地温上昇を図っておく。また、耕起、施肥、畝立て等の作業も定植 10 日程度前には済ませておく。さらに、畝立てと同時にマルチ、トンネルを設置しておき、十分に地温を高める。なお、定植時の地温は、トマトでは 15℃以上、キュウリ、メロンでは 18℃以上に高めておくことが必要である。

<土壌水分確保>

圃場が乾いている場合は定植 2～3 日前に十分かん水しておき、地温低下を防ぐとともに地温を

回復させる。

<保温>

内張カーテンを設置する。特に暖房を行う場合には、燃料の節減効果が大きい。

葉菜類等

- (1) キャベツ、ハクサイ、ブロッコリーの育苗は、ペーパーポット（72 穴）やセルトレイ（128 穴）を利用し、用土は市販の培土を用いる。

ハウス内で育苗を行うが、厳寒期の育苗となるためトンネルや温床線での保温・加温が必要である。播種後発芽までは 18～23℃の温度を確保し、発芽揃い後は昼間 15～20℃、夜間は 10℃以上を目標に管理する。かん水はできるだけ控えめに、日中はできるだけ光線を当て徒長防止に努める。

施設野菜

- (1) 軟弱野菜

ハウレンソウはべと病予防のため、ハウスの換気を行いハウス内が過湿になることを避けるとともに、防除薬剤の予防散布を行う。

- (2) イチゴ

最高気温 28℃、最低気温 5℃を目安に温度管理を行う。うどんこ病やハダニの防除を徹底する。

露地野菜

雨水、融雪水が圃場内に停滞しないよう排水を再度徹底する。ネギ、キャベツ、ブロッコリー、タマネギ、ニンニク、ラッキョウ等の越冬野菜の追肥については、融雪後早めに施用し生育促進を図る。